

コミュニケーションの回復

奨励	村山 盛芳〔むらやま・もりよし〕
奨励者紹介	日本キリスト教団浪花教会牧師

世界中は同じ言葉を使って、同じように話していた。東の方から移動してきた人々は、シナルの地に平野を見つけ、そこに住み着いた。彼らは、「れんがを作り、それをよく焼こう」と話し合った。石の代わりにれんがを、しっくい代わりにアスファルトを用いた。彼らは、「さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしましょう」と言った。主は降って来て、人の子らが建てた、塔のあるこの町を見て、言われた。「彼らは一つの民で、皆一つの言葉を話しているから、このようなことを始めたのだ。これでは、彼らが何を企てても、妨げることはできない。我々は降って行って、直ちに彼らの言葉を混乱させ、互いの言葉が聞き分けられぬようにしてしまおう。」主は彼らをそこから全地に散らされたので、彼らはこの町の建設をやめた。こういうわけで、この町の名はバベルと呼ばれた。主がそこで全地の言葉を混乱（バラル）させ、また、主がそこから彼らを全地に散らされたからである。

(創世記 11章1-9節)

五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、`霊`が語るままに、ほかの国々の言葉で話した。さて、エルサレムには天下のあらゆる国から帰って来た、信心深いユダヤ人が住んでいたが、この物音に大勢の人が集まって来た。そして、だれもかれも、自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて、あつげにとられてしまった。人々は驚き怪しんで言った。「話をしているこの人たちは、皆ガリラヤの人ではないか。どうしてわたしたちは、めいめいが生まれた故郷の言葉を聞くのだろうか。わたしたちの中には、パルティア、メディア、エラムからの者がおり、また、メソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントス、アジア、フリギア、パンフィリア、エジプト、キレネに接するリビア地方などに住む者もいる。また、ローマから来て滞在中の者、ユダヤ人もいれば、ユダヤ教への改宗者もあり、クレタ、アラビアから来た者もあるのに、彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞くとは。」人々は皆驚き、とまどい、「いったい、これはどういうことなのか」と互いに言った。しかし、「あの人たちは、新しいがどう酒に酔っているのだ」と言って、あざける者もいた。

(使徒言行録 2章1-13節)

浪花教会

こんにちは。今、ご紹介いただきました浪花教会牧師の村山盛芳と申します。浪花教会といえますのは、大阪市内の淀屋橋と北浜のちょうど中間にあります。教会ができて136年、今の教会は83年前に建った、かなり古い建物です。よく見学の方や、結婚式を挙げたいとおっしゃる方が訪ねてくださいます。最近では、衛星放送のBS朝日で、日曜日正午から『100年名家』という番組で取りあげてもらいました。日曜日なので僕は見る事ができなかったのですが、劇団「カムカムミニキーナ」の八嶋真人さんと、女優の牧瀬里穂さんが二人でMCをやっている番組です。それを見て、教会を見に来る方もいらっしゃると思います。もし古い建築物に興味のある方がおられたら、大阪まで出てきたときにはお立寄りください。丁寧にご案内をさせていただきます。

自分の歩みをふり返って

私自身は同志社大学の神学部に1977年に入学して1982年に卒業しました。卒業後、シンガポールの神学校の大学院に行って、そこを中退して牧師になりました。単純に引き算しても大学に5年いたことになりませんが、勉強が大嫌いで、早く大学を離れたいと思っていたのですが、大学の先生が「もう1年いてね」って言うものですから、5年目に英語の2単位のために毎週大学に通いました。英語の単位を4年生まで残していたことを、友だちには「アホや」と言われましたが、本当にアホやなと思っています。英語の2単位のために1年間余計に他の人よりも大学に通って、どういうわけか、シンガポールの神学校に行くことになりました。シンガポールの神学校というのは英語と北京語で授業があります。私は、北京語が全然わかりませんから、英語の授業をとっていたのですが、大学の同級生は、「英語で単位を落とした奴が、英語で勉強するというのは信じられない」と、温かい意見を述べてくれました。

高校は京都の洛北高校というところに通っていましたが、英語のグラマーで1をとったことがありまして、その高校の友だちからも「お前が英語で勉強するか」と言われまして、「別にかまへんやないけ」と言いながら3年間のコースに在籍し、単位は取ったのですが、卒業論文というものを書けずに帰ってきたので、中退ということになっているわけです。英語ができない私が英語で勉強することについては、自分自身も、ものすごく驚きがあったのですが、いろいろな事情があって、仕方なくそういう道を選ばざるを得なくなったわけです。授業が始まると、じっとクラスに座っているしかないのです。日常会話も不自由な人間が、いきなり大学の講義を英語で受けるわけですから、なんのこともやらさっぱりわかりません。「ほとんどこれは行だな」と思いながら授業に出席していましたが、そういう困っている人を見ると優しい人が手を差し伸べてくれるものです。その優しい人は、オーストラリアから来ていた、デニスでした。私は、彼とすぐに友だちになりました。彼は、ノートをとるときにレポート用紙の間に1枚カーボン紙を挟んでくれまして、ノートをとってそのカーボン紙で写った下の方を全部私に渡してくれました。それがなかったら、おそらく単位は取れなかったと思います。それからアメリカから来ていた宣教師が、見るに見かねて「モリヨシ」と声をかけ、英語の特訓をしてくれました。私は、そのように助けてくれる人がいたから、シンガポールでの生活を無事に過ごせたのです。本当に人に助けられながら、シンガポールでの生活を終え、日本に戻ってきました。

その後、新潟県の教会、香港の教会、台湾の教会と、歩みを経て今、大阪の浪花教会というところにいるのです。

知らなかったこと

シンガポールにいたときに、シンガポール人の友だちが「ご飯を食べにおいで」と言って私を家に呼んでくれました。彼の家に行って、ご飯を食べて、ご家族ともうちとけていたのですが、そのなかで一人だけ私のことを無視する人がいました。後になってその友だちに「全然口をきいてくれなかった人がいましたけど、どうしてですか」と聞きました。シンガポールは昔、日本の領土だったことがあります。その時代は昭南島という呼び方をされていました。昭和の昭に南の島です。太平洋戦争時に日本軍がたくさんの一般市民を殺しているのです。私はそのことを知らなかったのです。シンガポールに行く前に勉強しておけばよかったのですが、先ほども申しましたように勉強嫌いでしたから、「行ったらなんとかなるやろ」と思って行ったわけです。シンガポールが日本の領土であったことも知りませんし、そこで日本人が非戦闘員と呼ばれる一般市民を虐殺したことも知りませんでした。

口をきいてくれなかった人というのは、その時代に家族を殺されたという経験をもった人でした。だから、日本人は大嫌い。そんな歴史があったと知らなかったことを、私はとても恥ずかしく思いましたし、その友だちに「そういう事実があったことを知らなかった。大変恥ずかしいことだと思う」と言いました。その同じ学校の友だちは、「シンガポールの人は、みんな知っているよ。そのことを勉強しているから。でも、それを知らないことは、別に仕方のないことだと思うけど、知っておいたほうがいいよ」と言われて、その事実を学びました。

皆さん、シンガポールに行かれたことはありますか。シンガポールに行くとき、マーライオンという像があります。上半身がライオンで下半身が人魚で口から水を出しています。そのマーライオンのすぐ近くに、4本の柱の建造物があります。観光でも行かないし、説明もされないものなのですが、「何ですか」と尋ねたら、「戦争の記念碑だ」とガイドさんは教えてくれるはずですが。戦争で亡くなった方たちのために建てられた、そういう建造物なのです。柱が4本というのはシンガポールを形成している4つの民族を表しています。マレー系の人びと、インド系の人びと、中華系、中国系の人びと、それから主にイギリスの植民地でしたからイギリスの人びとを表しているのです。

戦争で亡くなった、特に戦闘員ではない一般市民の人びとのことを記念して建てられたそういう建造物です。それも聞かないとわからない。教えてもらえないことです。でもシンガポールの人はみんな知っているわけです。知っている人と知らない人がいて、知らないことがあたりまえのように生活しようと思ったらできますが、でも、それはフェアなことではないと私は思っています。

私を家に招待してくれた友だちは、「自分も昔あったことを知っているし、そのことを教えられているから日本人に対してはよい感情をもっていない」とはっきり言ってくれました。でも「キリスト教の信仰をもつようになって、赦すとか、理解をするということの大切さを学んでいるし、自分が神様に赦されているということを知っているから、赦さないと思っている人も接することができるんだよ」という話をしてくれました。そのことを聞いたときに、キリスト教の信仰というのは改めて力がある、人を生かすということができるんだということをおもいました。

ペンテコステの出来事

今日、読んでいただいた聖書の箇所は、創世記のバベルの塔の話と、それから使徒言行録のペンテコステの出来事の箇所でした。バベルの塔の話というのは、人間が天に届くように神のようになろうとして上に塔を建てていった。それを見て神様が言葉を通じなくされた。乱された。そういう話です。ペンテコステというのは聖霊が降（くだ）って教会が生まれた。教会の誕生日のことです。簡単に言うと、そういう出来事です。

この二つの聖書箇所では、人間が神のようになろう、人間が神にとって代わろうとする。違う言い方をすれば、人間というのは、やろうと思えばなんでもできる。神という存在を無

視して、思いのままに生きることができる。そういう人間に対して、そうではないのだということを神が示された。そして、人間が自分本位に生きるのではなく、人の話を理解するか、人にわかってもらえるように話をする存在に、聖霊が降りたことによって変えられていったことを表しているのだと私は理解しています。理解する、英語でunderstandという単語が使われます。“under”、下に、“stand”、立つのです。人を理解しようと思ったら、あるいは人にわかってもらおうと思ったら、その人と同じところに立つか、その人よりも低いところに立たないと理解されないし、理解できないということを、そのunderstandという言葉は表していると思います。上から物を言う、というのはunderstandではなくてupperstandということになると思います。上から偉そうに、「わかれよ。お前、それぐらい理解せえよ。言うこと、わかっているやろ」という態度では理解されないし、理解できないわけです。

先ほど、うちの教会で結婚式を挙げたいという人が来る話をしましたけれども、結婚式を挙げる人にはお願いをしていることがあります。それは、できるだけ教会の礼拝に出席してくださいということです。日頃、ここに来ている人が、どういう思いでその場所で礼拝をしているのかを、結婚式場ではなくて礼拝をしている場所であるということを理解してほしいからです。あわせて、結婚式の前に4回、教会でカウンセリングをうけていただくことを条件に結婚式をさせていただいています。そのカウンセリングのなかで、「相手が自分のことをわかってくれている」とか「相手のことは、もうなんでも言わなくてもわかっている」と思っているならば、それは誤解であるから、自分が考えていることを相手にわかるように表現してくださいと、お願いをしています。

相手のことがわかるとか、相手にわかってもらえるというのは恋愛時代のごくごく短い期間、そういうことがあるかもしれないけれども、結婚生活というのは長く続いていくものだから、何を思っているか、何をしてほしいのか、それから相手が何を考えているのかということを、最初に表現して、言葉を使って相手に伝える良いコミュニケーションをとれるようにならないと、後々めんどくさいことになるよという話をします。

実際に、横から聞いていると、その話をしている人同士が独り言をしゃべっている、一方的にしゃべっている二人が存在するということが、結構あるのです。ですから、理解をするとか、わかってもらうというのは、とても大切な事柄だし、それから言葉を使ってコミュニケーションを回復するということは、とても重要なことだと思います。

聖霊が降って、それぞれがわかる言葉で語れるようになった。それがペンテコステでの出来事だと、聖書が私に教えているわけです。それは神が、私たちをつくったものの責任として、私たち一人ひとりのことを理解してくださっている。その典型的な出来事が、イエスという救い主が私たちと同じ人間の姿になったということだと思うのですが、そのことをしてくださった神という存在を認めているから、他の人に理解してもらえるように語る。他の人が語っていることを理解するように、その事柄、言葉を受け止める。そういう存在に私たちがなれる。そのことを聖書は語っていると思うのです。

ですから、自分が愛されているということに気づいた者として、同じように愛されている他の人と一緒に歩いていくときに、コミュニケーションをとることはとても大切です。コミュニケーションの大切さを聖霊を通して神様が示してくださった、そのペンテコステの出来事を、一緒に覚えておきたいと思い、お話をさせていただきました。

2013年5月15日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録